



るゝで、佐伯地方の氣候が温暖の一原因ともなつてゐる。



### 六、気 候

下の統計が示すように、表日本式氣候で、大分県の氣候区に於ては、南海氣候に屬する。従つて高温多雨で、特に降水日數が少く、おりに多きことである。黒島のヒコー樹や薩江のサンゴ礁など、亜熱帯性な北限であることと云われることも、白村から佐伯に通動してゐる人が、シヤツ一枚違ふと言つてゐることなど、佐伯地方の暖かき実感を示してゐる言葉である。冬降雪日數は

佐伯の気温と雨量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
氣 温	6.0	6.6	9.5	14.4	18.4	22.0	26.1	26.8	23.9	18.2	13.3	8.4	16.1
雨 量	43.3	58.8	113.6	154.2	169.8	261.3	285.2	247.5	300.1	149.1	72.1	48.8	978.8
降水日數	6	7	10	11	10	16	12	10	12	9	8	7	118

冬の氣温 7度前後  
 夏の氣温 30.8度  
 日中 21.8度  
 夜 21.8度  
 平均 26.8度  
 年々暖かい  
 高温多湿  
 日中 温度差 9.0度  
 (大分県の地理による)

三日程度であることもその特色がうかがえる。雨量の点で市役所の課長さんには次のような話をしてくださる。一日豊原を敷設する時に、黒瀬川と河川の性質を十分調査しないで、大分地方に基準を取つたため、八幡地区では鉄橋と水面は寸草なくなり、洪水の場合には大へんな惨状を呈する。特に最近密相山の湖盤が多くなつたので、雨が降りはじめると短時間で下流は洪水となる傾向が益々ひどくなつた。昭和四十一年には時間雨量にして三日、三十六年からは四十年に最高八十ミリが六回を見たと云う。

台風はこの地方ともよく通過し、東南から北西に斜断する場合や、西回折進を北上する場合も九州でも最多雨地帯となる。反面冬の季節風に於いては北西の風は九州山脈に當り、熊本県方面に雨や雪を降らし、佐伯地方にはフェーン現象で乾燥地帯に入り、豊後水道を渡つて再び湿度を持つて西回折上陸する。だから佐伯地方の天気予報は四回の変換果てな現象とも必ずしも一致せず、予報を立てにくいといつてゐる。とくに北東(北ガ子)の風は港にはほとんど直前に吹きつけるので、小型の船舶は十分警戒を必要とする。

冬の西風も海上ではかなり吹くが、九州西岸の高原などとは問題にならない。西風の球団が冬明けの練習は、島原ではそうそうに引上げて平和台に帰ることにする。佐伯球場に於いては、合格の判定をうけたという。佐伯港を中心とする風雨も、台風を除いて、欠航せねばならないことは年中ないといつてもよい。

以上のような自然的条件に恵まれて、佐伯の業者が、よく聞かされる言葉に、天恩の良好という声がある。

私達は此國の統計資料を本にして判断してゐるつもりで  
あるが、佐伯の人の話では、どうもお国自慢の異いかし  
て楽成が濡かきないやいな、私を満足させて  
犬も歩けば糞に当たるとしてまゝうか、私を満足させて

くれた二つの話しかわさた。

一ツは、長い夏休みも終つてする八月二十七日の虫  
ま事である。前日の二十六日コソ方、港とぶらついてい  
た私は、税関の役人から、明日午後一時、石川津に碇泊  
中の紀洋丸（一ツ三ツト、太平洋運送株式会社（佐伯）に案内す  
るかどうかと促がされた。早速同僚と生徒とをとい、九  
人で約束の二十七日午後一時、税関の小船から本船に近  
づき、高いタラップを踏んで乗りこんだ。一等航海士と  
税関の役人を中心に、私達は船長室のテーブルを囲んで  
お茶を飲んでおしゃべりした。一等航海士は、今  
までメロンを一人一人の前で置いた。一等航海士は、今  
までメロンを一人一人の前で置いた。どうぞお上り下さいと  
すすめ、私達は質問を要求した。

「佐伯の港の特徴は何んですか」と私が聞いた。

「よい港です。いつも波静かで、波浪のあるところは只作  
業は困難です」と一等航海士は答えた。

「軍が手に入れたのも無理はないです。ホントにいい  
港です」。かえりように税関吏が答へた。

「あつたこれだけの返答であつたが、二人の癖と言葉が  
ら、私には非常な重みを持つて聞こえた。

今一つは、九月十三日土曜日、港にある検査部を訪問  
した際、二人の係官に同じ質問を發した。係官は

「波静かでない港です。私は過去五ヶ所勤務地を勤めま  
したが、こんな静かな港は初めてです。とくに冬波が高  
くて仕事ができにくいものです。今まで一回も検査旋  
回もせずに波が荒れて困ったことはありません」と、もう

日也まて波が荒れて困ったことはありません」と、もう

一ツの係官も何回となく肯ついていた。鶴見半島の尖端  
にある大島と蒲戸の岬に分け、お大なる湾岸に、紐島、行々  
の大聖船が風よけ、波よけに碇泊してゐることもある。  
いう話も聞いた。

波浪が少く作業がしやすいこと。湾岸が広く深く十米  
以上もあるので、大型船が心配なく湾岸に入ることができる  
こと。干満の差が小さいので、小船でも大型船でも碇岸  
が繋留、進水に便利が良いこと。

佐伯の港が天然の良港であると自他共に許すことが出  
来るのは、主として右の條件がそろつてゐるからである。  
(以上)

探訪記

國東半島に伴ふ文化を訪ねて

―バスによる秋の現地研修の旅の記録―

幹事 羽 柴 弘  
（俳句） 吉 田 雅 雄

十一月三日、文化の日。氣にしていた天候も遂々晴れ、  
午前七時佐伯駅前を出発したバスは、次々と今日の本拠  
者をおして國道十号線に出る。一行四十九名會員外が三  
分の一、婦人が半数、大型バスなれば身体も楽であ  
る。大分、別府を経て午前九時半立ち着、ここで伊東、  
大岩両氏に迎へられ、その御案内をいれ、馬上八  
幡社の境内にある諸方惟棠を祀る石の祠にまいる。

諸方惟棠は佐伯氏の祖先、上州沼田の配流を解かれて  
佐伯に歸り途中、馬上に急死されたと伝えられる悲運の  
人。その最期の地点の伝承などを両氏にお話せよ。馬  
上八幡社は社殿も大きく境内も広く、なまの老木などあ